

# テーマも多彩に まるごと吉野川“魅力再発見”講座

## 第1回講座

6月8日(土) 14時

於：徳島大学総合科学部

第1回講座は、人文地理学会との共催で第279回例会として開催。「川の流域史」〈吉野川の特性と文化的景観〉を全体テーマに、平井松午さん(徳島大学)、山村亜希さん(愛知県立大学)、春山成子さん(三重大学)から講演・研究発表いただき、その後、「吉野川の営みと文化的景観」というテーマでパネルディスカッションを行いました。また、学会に合わせて徳島大学附属図書館では、所蔵の伊能図(原本)や川絵図などの貴重な資料を特別展示。専門研究者、大学教員はもとより、地理教育の現場に関わる教員、学生、一般の方も多く参加し、熱このもった講座となりました。

## 第2回講座

7月28日(日) 11時

於：徳島県教育会館

坂東太郎、筑紫次郎、四国三郎という異名はいつ頃、どのように名付けられたのでしょうか? 国土交通省大臣官房技術調査課電気通信室長である松井健一さんによる講演「坂東太郎、筑紫次郎、四国



↑軽妙な語り口で大胆な仮説を話される松井さん  
←熱心に聴き入る三河川の関係者



三郎のルーツ「吉野川は、なぜ『四国三郎』なのか?」は、まさにそんな謎に迫るものでした。

松井さんは、明治政府により編纂された百科事典「古事類苑」や江戸時代の文献における三大河川についての記述を次々紹介。初めて「日本三天河」という記述が見られるのが、1746年刊の「本朝俗語志」で、そこにはなんと「四国次郎」と記されているとか! ところが明治7年(1874)に刊行された当時の地理の教科書「日本地誌略」では「四国三郎」に……! 松井さんは、阿波と安房の忌部を通じたつながり、菱垣廻船による物流などを上げ、江戸時代には「四国次郎」の呼称が一般的だったのではないかと、明治維新後の国内情勢が「四国三郎」という呼称を定着させたのではないかと、という仮説を発表されました。

この日は利根川、筑後川の関係者も多く参加しており、「かつて吉野川は兄貴分だった?!」という場面では会場にどよめきが起こりました。興味深く、あつという間の1時間でした。

## 第3回講座

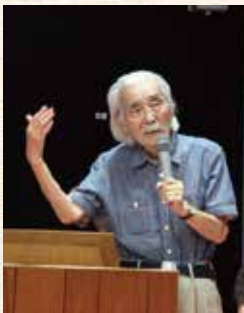
8月25日(日) 13時

於：とくぎんトモニプラザ

とくしま学博士・脇川弘さんは、半世紀にわたって県内外の多くの橋を手がけてきた橋梁技術者です。「橋は自分の子供のようにかわいい」という脇川さんの講演テーマはもちろん、「吉野川の橋」。現在、吉野川には47本の橋が架かっています。脇川さんは、橋がなかった時代の「渡し」から、昭和初期に架けられた三好橋や吉野川橋、平成24年に完成したばかりの阿波しらさぎ大橋まで、時代を代表する橋について、なりたち、時代背景、デザインの特徴や工事の苦労談、知られざるエピソードなどを技術者ならではの視点から話してくださいました。



↑「橋は吉野川と共に生きる県民の英知の結晶」と話す脇川さん  
←郷土歴史研究者として知られる三好昭一郎さん



## 第4回講座

10月13日(日) 13時

於：あわぎんホール(県郷土文化会館)



↑四国地域災害対応委員も務められている古田さん  
←「地形からみた歴史」はじめ著書も多い日下さん



南海地震に備えて官民挙げての防災訓練の実施など意識の高まるなか、第4回講座は災害と防災がテーマ。徳島文理大学教授・古田昇さんに「吉野川平野の地下を探る」平野の特性と地震災害との関係、立命館大学名誉教授・日下雅義さんに「安政大地震による被害と住民の対応」吉野川下流域平野を例にという題目で講演いただきました。地理的特徴を知り、先人に学ぶことで起こりうる被害を予測し、物心ともに備えることができます。真剣に聴き入る参加者の姿が印象的でした。